

field

チャットをめぐる人々の営み

「パジャーロ」チャットの流通経路

山本雄大

はじめに

チャット(*Catha edulis*:アラビアチャノキ)とは、東アフリカの高地林に広く自生し、北東アフリカやアラビア半島で栽培・利用されるニシキギ科の常緑樹である。樹液にエフェドリン系のアルカロイドを含有しており、その新鮮な若芽の柔らかい葉や茎を噛むことで軽い覚醒作用を得られる嗜好品植物である。

エチオピアに流通するチャットにはさまざまな名前がつけられている。消費者や商人が市場でひとつひとつのチャットの名前を商品名として呼びわけて売買するのはもちろんのこと、農家もそれぞれの商品名ごとに区別してこまやかに栽培・収穫をおこなっている。私は、この商品名を「銘柄」と呼んでいる。銘柄には多くの場合、生産地の地名がつけられ、消費者はそこから多くの情報を読み取ることが出来る。

アジスアベバでは、エチオピア各地から流通してくる六つ以上の大規模な流通ルートを持った銘柄が知られている。その中の一つに、効き目のマイルドな高級銘柄として知られる「ウォンドベレチェ」がある。このチャットは南部諸民族州シダマゾーン、ウォンドゲネットから栽培・出荷されるもので、新芽のみが束ねてある非常に手間のかかった銘柄である。生産者は一度にまとまった収入を得るために、畑一面が同時期に同程度の新芽を出すよう調整

する。流通関係者は、鮮度の失われやすい新芽を、毎日新鮮なうちに一定量出荷するため、買いつけ・仲買・輸送・小売を分業している。地域の住民の多くがこのチャット流通に関わっており、行政が管理するチャット出荷市の開始時間が変わるたびに、地域全体の生活時間帯がガラリと変化するほど、ウォンドゲネットはアジスアベバへのチャットの出荷に特化した地域である。

その一方で、ウォンドゲネットにはアジスアベバへの流通ルートには乗らないチャットも存在する。生産や流通の過程で主要なルートからこぼれ落ちるチャットにも多くの人が関わり、地域の人びととチャットの多様な関わりをうかがうことができる。近隣都市シャシャマネ経由で流通し始め





(写真1)

た「パジャーロ」も、2006年ごろから既婚女性たちによって販売がはじまった銘柄の一つである(地図)。

パジャーロチャット

パジャーロチャットは、葉の部分のみを袋詰めした安価な銘柄である。その名前は四輪駆動車「パジェロ」に由来するといわれている。一袋あれば一日中強い効き目を得られるところから、一日中走り続けられる強い車であるパジェロにたとえられている。シャシャマネの消費者からは「一日中」を意味するアムハラ語「ムルケン」とも呼ばれている。このパジャーロチャットの収穫は、子どもたちが担っている。

ウォンドベレチェの農家は、チャットが同時に芽を出すように広い畑全体を管理・調整している。収穫は、ある一日のなかでも日中のあいだにおこなわなければならない。しかもただ単に芽を刈り取るだけでなく、その芽についている余分な大きな葉を一枚一枚丁寧に指で落とし、出荷市での取引単位へと均質に束ねなければならない。その後、夜間に開かれるチャット市へこれらの小束を持ち込み、仲買商人から買い叩かれないようにアムハラ語で渡りあう必要がある。多くの場合、これらの作業を生産者だけがこなうことは困難であるため、これを代行する商人が存在する。「畑の商人」

と呼ばれる彼らは、生産者から畑の収穫権を買い取り、自分たちが雇用した作業員たちに一連の作業をおこなわせてチャットを市場へ持ち込み、その差額から利益を得ている。商人自身は収穫作業の現場にはほとんど留まらず、翌日以降の収穫権交渉のために生産地を歩きまわっている。作業員たちは10代後半から30歳前後の若い男性が多く、刈り取り、束作り、交渉をおこなう。どの人も熟練者ばかりであるが、刈り取った芽から大きな葉を落とす最も手間のかかる作業をおこなう際には人手が足りなくなる。そこで活躍するのが、収穫権を売った世帯や近隣の世帯の子供たちである。彼らは、親や親族から、畑の商人が契約範囲を超えて

チャットを収穫したり、木を痛めるような過剰な収穫をおこなわないように監視する役割を与えられている。だが、彼らはその役割を担うだけではなく、チャット流通の仕事に参画もしている。(写真1)

畑のそばの木陰に運び込まれるチャットから余分な葉を落としていると、見る間に葉の積み重なった山ができる。ウォンドベレチェとして出荷されるチャットは中途半端な大きさの葉を全て落としてしまうため、その中には他の銘柄ならば噛めるものとして残される葉も多く含まれている。作業の合間に子供たちは、持参した袋にそうした葉を集めていく。これが彼らの手伝いへの駄賃として与えられる。かつては畑の商人が小遣い程度の現金を子供たちへ渡していたが、現在では子供たちが出荷されない葉を集めることを黙認する行為へと変化した。子供たちは、作業員たちがその日の収穫分を市場へもっていくのに同行して、葉の詰まった袋を売りに出かける。パジャーロの流通の始まりである。

パジャーロ流通の担い手たち

町へ向かう道の途中、道端で袋を持った子供たちに声をかける男たちがいる。彼らが子供たちからパジャーロの入った袋を買いつける。彼らは、シャシャマネへパジャーロを出荷している女性た

ちに依頼されている。女性たちが、町の入り口で子供たちを待ち受けるだけでは買いつけ競争が激化する上に大変な混雑を起こしてしまうことと、子供たちがあまり家から遠くまで出かけたがらないために、男たちは道の要所で待ち構えている。パジャーロは安価で売られる銘柄であり、彼らは子供を相手にしているためにかなり強気で買叩こうとする。だが、その日に陣取った道の先での収穫作業の数によって相場が大きく変わるために、男たちにとって博打的な部分も大きい。男たちと女性たちは明確な雇用関係にはなく、これくらいの量をこの額で現金を渡される委託関係にあるため、条件を満たせなければ赤字になってしまう。渡した額に対して買いつけ量が少なかったり、現金の持ち逃げなどのトラブルも多いため、買いつけの仕事には依頼する女性の親族がついていることが多い。

ウォンドベレチェの出荷市が始まる午後6時頃、町の人口がチャット市の広場に集中する。静まり返った町の中、男たちは買い集めてきたパジャーロを女性の自宅に運び込む。全体を均質にするためと葉についた水滴を飛ばすために、大きなゴザの上などにチャットの葉を広げ、何度も大きく混ぜ返す。しばらく置いたのち、決まった大きさの黒いビニール袋へと小分けしていく。一袋あたりで値がつくために、買い集めた量と、そこからつ

くることのできる袋の数とをにらみながら、まず目安の量を決める。その後は、大雑把な手づかみで次々と袋詰めされていく。どの袋もほぼ同じ重さになる。最後に微調整をおこない、袋の口を軽く結び、作業は完了する(写真2)。ここまでの作業は、買いつけてきた男性がおこなうことが多い。

ウォンドゲネットでは最近までチャット流通に女性が直接的に関わるのが少なかったため、女性たちはいまだにチャットの取り扱いに不慣れなところがある。チャットの葉を見ただけでチャットの栽培状態を言い当て、その品質の良し悪しを見抜く能力や、チャットの保存や取り扱いに関する知識や経験に関しては、男性たちに一日の長がある。それでも女性たちがチャット流通に携わるのは、彼女たちの多くが家庭に問題を抱えているからである。例えば20代後半のMさんは、別の地域からウォンドゲネットへと嫁ぎ、娘を身籠ってすぐに夫を亡くした寡婦である。また、30代のNさんは、2人の子供を小学校に通わせているが、数年前から夫が酒やチャットに金を使い果たすようになり、家に金を入れなくなってしまった。このような背景を持った女性たちがチャット流通に参入している。

地域の外へ



(写真2)

翌朝午前6時頃、大きな穀物袋にパジャーロの黒い袋を詰め込んだ女性たちが、町の広場に集まってくる。この場所からシャシャマネへ向かう小さなバスが出る。このバスはシャシャマネのバスターミナルではなく、市街地内部にあるチャット市に直行する特別便である。当然、パジャーロを売りにいく女性客がほとんどであり、車内はまるで団体旅行のような雰囲気である。

途中、南部諸民族州とオロミヤ州との州境に税関がある。州をまたいで特定の産品を輸送するには税金を支払う義務があり、チャットはこの税関の主要な税収源である。しかしパジャーロは課税の対象とはなっていない。女性が家族や子供のために収入を得ようと



(写真3)

する活動から税金を取るなど考えられないという共通認識がある上に、先に述べたようにパジャーロ流通に携わる女性が特に厳しい経済状況にあることも知られているため、いわゆるお目こぼしがなされている。しかし、それでもバスは道路脇に停められ、全員が降車したのちに、職員によって積荷がチェックされる。見逃される状況を逆手に取り、パジャーロを詰め込んだ穀物袋の奥に、女性であっても課税対象となるパジャーロ以外のチャットやコーヒー豆などを密輸しようとするしたたかな女性が後を絶たないためである。

無事州境を越え、シャシャマネ市街地に入ったバスは、チャット小売店や仲買人の集まる小さな広場に横付けされる。女性たちが広場の中央で袋を広げれば、チャット市が始まる。彼女たちの取引相手は、シャシャマネ市内でパジャーロを消費者に売る小売店主や、ここからさらに周辺の小さな町に卸す仲買人などである。一人の女性が持ち

込んだパジャーロの袋全てが一度に買われることはない。それでも、数人の得意客にまとまった量を売ったのち、何人かと交渉を繰り返していれば持ってきたパジャーロはすぐに売切れてしまう。遅くとも午前10時頃には、広場はチャットを小売するための場となる。ここでチャットを売りつくした女性たちは、再び路線バスでウォンドゲネットへと帰っていく(写真3)。

仲買人によって買いつけられ、シャシャマネ近郊の小さな町まで運ばれたパジャーロは、「お母さんのチャット」と名前を変えて小売されている。

まとめ

ウォンドゲネットでは、毎日4トン・トラック8台が遠方の大都市に向けてチャットを出荷している。このパジャーロチャットの流通は、非

常に小規模なものにすぎない。しかしこれまで見てきたように、この銘柄の流通は、ウォンドベレチェのチャット流通に正式に参加しているわけではない子供たち、チャット市の時間に仕事をしていない男たち、そしてこれまでチャットに直接関わってこなかった女性たちによって担われている。このローカルな銘柄の流通を支えているのは、さまざまな需要を持つエチオピアのチャット文化の懐の深さであるといえる。多様なチャットの銘柄を取り上げることは、エチオピアの嗜好品文化を考える上でも重要である。今後もバラエティ豊かなチャットの銘柄を手がかりにして、チャットの生産、流通、消費における人びととチャットとの関わり、チャットを介した人々の関わりについて検討し、地域社会の動態を描き出していきたいと考えている。

(やまもと・たけひろ/京都大学)